

木ヲ燃シテ夜ヲ照スモノナリ、

火鑽ハ、木ヲ鑽リテ火ヲ出スヲ云フ、之ヲ切火ト云フ、燧ハ金石ヲ打チ合ハセテ、火ヲ出スヲ云フ、之ヲ打火ト云フ、

膏油ハ、並ニアブラト云フ、動物ヨリ取ルヲ膏ト云ヒ、植物ヨリ取ルヲ油ト云フ、又天然ニ産スルモノアリ、石腦油ト云フ、膏油ハ燈火ノ用ニ供シ、食料ニ用キル等、其用甚ダ廣シ、而シテ頭髮ニ用キルハ、容飾具篇、髮油條ニ載セ、藥物ニ用キルハ、方技部藥方篇ニ載セタリ、參看スベシ、

薪ハ、タキギト云フ、焚木ノ義ニテ、之ヲ竈爐等ニ用キテ、燃料ニ充ツ、故ニ又カマギト云フ、炭ハ、多ク櫃檣等ノ木ヲ炭竈ニテ燒キテ作り、火ヲ點ジテ暖ヲ取り、又物ヲ煮ルニ用キル、

名稱

〔新撰字鏡〕火炬同巨音丞也、太比、又止毛志火、

〔倭名類聚抄〕燈火十二燈燭四四聲字苑云、器照曰燈音登、豎燒曰燭音度、和名並野王按、燈燭、蘭膏所燃之火也、

〔箋注倭名類聚抄〕燈火四祭統注、燈豆下跗也、急就篇、鍛鑄鉛、燈、錠、鏃、顏師古注、燈所以盛膏、夜然燎者也、其形如杆、而中施缸、有柑者曰錠、無柑者曰燈、柑謂下施足也、王念孫曰、燈之形狀、略如禮器之

登、故爾雅瓦豆謂之登、郭注云、卽膏登也、段玉裁曰、豆之遺制、爲今俗用燈盞、說文、燭、庭燎火燭也、中

略 所引文今本玉篇無載、楚辭招魂、蘭膏明燭、華燈錯些、

〔東雅器用〕燈燭トモシビ 令義解に、油火爲燈、蠟火爲燭也、と見えたり、略トモシビとは、万葉集

に留火としるせり、卽是也、其光を留て消ゆる事なからしむるの義也、トモシビとは、トムの轉語、卽留といふ、卽是義なり、

〔倭訓栞〕前編 十八 ともしび 燈火をいふ、靈異記に燭もよみ、万葉集に留火と見えたり、竹のとも